

日比谷公園 — 100 年の矜持に学ぶ

Pride in HIBIYA PARK

進士五十八* Isoya SHINJI

1. 日比谷公園ウォッチングの契機と出版の動機

日比谷公園についての冊子としては、約 50 年前に『日比谷公園ものがたり』(1963, 財団法人東京都公園協会発行, A 5 版, 全 48 頁, 定価 150 円)がある。協会の刊行物となっているが、実際の執筆者は前島康彦氏である。

前島康彦(1910-88)氏は、国学院大学史学科を卒業、東京市で井下清公園課長に師事、約 20 年間の勤務を終え長らく東京都公園協会の『都市公園』の編集長を引受け、その間「東京公園史話」全 41 回を連載された稀有な公園史家である。私はこの本で日比谷公園に目覚めると同時に、前島氏には学生時代からお宅をお訪ねしたり結婚式にお出いただいたりして種々ご高配をいただいた。また晩年、東京農大に提出された学位請求論文『宗教緑地論』(東京農大出版会, 1985 年)をお手伝いするご縁もいただき、その学恩を深謝しているおひとりである。

なおこの冊子は改版され「東京公園文庫・1」として、前島康彦著『日比谷公園』(東京都公園協会, 1980 年, B 6 版, 全 102 頁)と題して発行されている。

それから半世紀、やっとい公園史が商業出版の企画を通った。進士五十八著『日比谷公園 — 100 年の矜持に学ぶ』(鹿島出版会, 2011 年, A 5 版, 全 240 頁, 2500 円)としてである。本書は、雑誌『都市公園』の連載(2006 年 7 月 - 2009 年 3 月)を基本に加筆改稿し、写真家山岸剛氏の撮りおこし風景を加え、全 12 章、年表、文献、索引を整理した。編集者は、建築学科出身の川尻大介氏であった。

私にとって、本書の出版はずっと気がかりであった宿題のようなものであった。

昭和 40 年代初め、高度成長下の東京では何事も新しいものへ建替えることが進歩だという価値観が大勢を占めていた。そんななか卒業論文の相談に恩師江山正美先生を訪ねた。私は 1 年生の夏、サークルでの京都庭園見学で日本庭園への関心を高め、試論だが「禅の庭否定論」や「河原者造型論」を構想しており、これを卒論にしたいと申し出た。そうしたら「君には日比谷公園の改造プランをやってもらいたい」と、おっしゃる。「昨年の A 君のは、余りに夢のようなプランで、井下賞には無理だったので、現実を

踏まえたプランを考えなさい。」当時、農大では江山先生は恐い先生で通っていた。何故、私が日比谷公園をやらなければならないのか、理由がわからない。しかし言い返すことも出来ず「はい、わかりました。でも日本庭園もやっていますか?」を、言うのがやっとならざるを得なかった。

こうして、約 2 年間、かなりの頻度で日比谷通いを続けた。この中で、はじめて公園というものが市民生活のなかにシッカリ融け込んでいること、実に多様に利用されていること等、いわば造園の社会的意味といったものを実感することができた。

ともあれ私は卒論を 3 冊提出した。年来のテーマ、「日本庭園河原者造型論」、先生に指示された「日比谷公園の歴史と評価(現況)」、その一部をなす「公園利用者の占有位置と占有空間特性」である。

江山先生は、厚さ 5 cm を超える「歴史評価」論文は編集でしかないが、「占有空間特性」は E. T. Hall に匹敵すると高評価。当時、大学院も研究室もなく、凡そオリジナリティ第一の研究というものの意味すら教えられていなかったし、国会図書館や公会堂、本多静六のドイツからの図書を見たいとロックアウト中の東京大学林学科を訪ねるなど結構な努力をそそいだ「日比谷公園の歴史」論文は完全に無視されたのだから、私としてはガッカリであった。

それでも「占有空間特性」論文が、大学の学長賞、公園協会の井下賞を受賞して、私は助手に採用され研究者の道を歩むことになる。

ただ、私はその前もその後も、前島康彦、井下清両先生から東京市の公園の歩みやエピソードを沢山うかがって、また当時学科顧問で時々お顔をみせられた上原敬二先生から明治神宮の杜の記録談などおうかがいして、「造園の本質と特質」の学びは「歴史」にあることを感じており、造園史・造園原論・造園計画原論方面を志向していたので、この卒論の意味をいづれ発現させたいと考えてはいたのである。

加えて、効果的造園教育方法として日比谷公園の有用性を考えた私は、大学教員となって思春期の学生諸君に関心の高いカップルの公園利用ウォッチングを演習課題とする

* 1944 年 4 月 8 日生。東京農業大学卒業、農学博士。東京農大助手、教授、同大第 10 代学長。日本造園学会会長、日本都市計画学会会長、第 20-21 期日本学術会議会員。日本造園学会賞、日本農学賞、読売農学賞など受賞、紫綬褒章受章。東京農業大学名誉教授。

ことにしたり、研究室ぐるみの合同研究テーマとすることにした。こうして私は、日比谷公園をずっと造園家人生の伴侶としてきた。もちろん、それにふさわしいポテンシャルを日比谷公園が持っていたからであるが。

ともあれ私の日比谷公園との出会いは、自らの意志というより恩師江山先生のお引合せによるものであったが、私の一生にとって非常に大きな存在となったのである。

結局、卒論日比谷公園の成立期と生活史が明らかになるに従い、この公園は公園そのものの歴史的価値を後世に伝えるべき「歴史的公園」であって、先生の指示である「改造」なんてトンデモナイという結論になったし、その後都庁から日比谷公園改造計画の検討委員を依頼されたときにも私の立場は歴史的公園の保全が第一というものであった。

本書によって私は、100年の前半期には絶えず改造が叫ばれた日比谷公園がようやくその歴史的価値、すなわち激変する大都市都心に不変の時間的空間的座標軸の原点として存在することの価値が認識されはじめた後半期を迎えたことを広くアピールするものにしたかったし、本学会特別賞と日本生活学会今和次郎賞のダブル受賞によって、或る程度所期の目的が果たされたかとほっとしている。

2. 『日比谷公園』で伝えたかったこと

公園というものは、単なる都市計画施設ではない。10案ちかい試案や提案から収斂した日比谷公園は、文明開化時代の日本人たちの西洋受容の態度を示したものと考えられる。

すなわち、教科書のようなシンメトリカルで幾何的広場の造家学者辰野金吾案を拒否して、日本人の肌目細かなやさしい樹林地芝生地にちかいドイツ林苑風デザインの造林(後の造園)学者本多静六案を採用した感性を持っていたことは重要である。同時に、先行案を縦覧して、そこに共通する気分を看取して人々が納得する原案にいたる、また噴出する世論を説得する苦労人本多ならではの対処策の極意はいまのコンサルタントにも大いに勉強になる。

単なる施設でない、と言ったのは「公園」の理想と思想である。江戸期と変わらない生活をおくっていた東京市民に、洋花・洋楽・洋食の“3つの洋”を提供したこと。S字カーブ大型園路でゾーニングされた多様で多彩な空間特性、廃仏毀釈の真只中で日比谷見附の濠と石垣という歴史的景観の保存を忘れなかったこと、首賭けイチョウに象徴される大木保存、心字池での江戸庭芸の特色、黒石使い、大久保の名物ツツジの活用、江戸庭芸の3つの山で三笠山を造成するなど、西洋風のなかに市民感覚に馴染む“和のテイスト”を上手に生かしていることなど、私には本多静六は「外形は西洋だが、内面(手ざわり、肌合い)は日本」すなわち「和魂洋才」、また別の言い方でいえば「ユーザーの公園」「Parks for People」精神を心得ていたのではな

かったかと思える。もちろんこれは本多だけのものではなく、日本人自身の「外来文明の受容態度」であって、外国の「公園文明」を見事に“日本文化化”した典型例とみることもできよう。

いずれにせよ、人々の求める“憧れの世界”(例えば、3つの洋)という理想を実現してゆくこと、それでいて彼らの感性に馴染んで人々が“好ましいと感じられる世界”を提供するのが「公園」というものだということを示した意義は大きい。デザインとしての明快さに秀れる辰野案には、そうした人々への愛情は感じられない。作品性よりも空間性に力点が置かれるべき「公園デザイン」の基本的性格の原点を、日比谷公園に見いだしたい。私が“西洋式ではなくて西洋風”だとか、“日本人好みの幕の内弁当的洋風公園”と呼ぶのは、大胆なS字型カーブの大園路や整形式のトラックの大運動場で“西洋イメージ”を印象づけながら、一方で雲形池や心字池、石垣、つつじ山で親近感のもてる“和のテイスト”を上手に配合するなど、どんな要望にもそれなりに応えて、結果的には“まあまあの満足”を与えるという、如何にも“日本的な成功”が「日比谷公園」の意味だと考えるからである。

今後の日本の公園デザインにも、そのやり方が良いかどうかは別の議論が必要だが、日比谷公園以降の日本各地の総合公園のモデルとなった理由はこの辺にあるのではなからうか。

ただデザイン以上に重要だと思う私の考えは、「公園生活史」という見方である。単的に言えば、“時間・歴史”の価値、公園にも人生があり、その公園生活史が公園自身の“人生の厚み=人間の魅力”をもたらすという価値観を持ちたいものということである。

首都の中心に在る公園としての特殊性もあるが、日比谷公園は、戦捷祝賀会、政治上の各種国民大会、元勳たちの国葬国民葬の舞台、すなわち赤の広場や天安門広場のような国家広場としての性格をもった時期もあった。

また不幸な戦争時代は、軍隊がおかれたり高射砲の据付けに伴い高木が伐採されたり、金属回収で柵が撤去されたり、食料難で菜園化したり、戦後はGHQに接収されたりしている。また震災、戦災に伴う避難場所、仮設住宅、遺体仮埋葬地などにも供されている。

一方本書では、これまであまり知られていない側面にも言及した。新聞記事の抄録で発見した“幻の日比谷公園の動物園”やわが国初の環境教育とも言える“末田ます女史のネーチャー・スタディによる日比谷児童遊園”の意味、それから“花壇コンクール、公園彫刻展、全日本自動車ショウ、など数々の公園イベント”、そしてそのすべてを実質的にプロモートしてこられた“東京市の井下清公園課長の公園経営論”などについてである。

最終章に「パークマネージメントのこれから」を掲げ、

激変する東京都心の日比谷公園が、如何にしてその歴史的公園としてのオーセンティシティを保持しながら、むしろ都市再生の方向性を公園側からリードできるかを考えるべきこと等唆したのは、永年の造園家の被害者意識を脱却し、これからはランドスケープ・アーキテクトの見識をもって、都市とオープンスペースのビジョンを実現していかなければならないとの思いからである。

昭和31年の都市公園法制定の理由が、公園用地を美術館博物館文化会館敷地として使わせないルールの確立にあったことは、造園家なら誰れもが知っている。その結果、都市は変化するが、公園は守りに入るだけになった。

しかし、井下先生の言葉にあるように「公園の経営には理想を持っていなければならないし、その一方で公園の経営は現実主義でなければならない」。理想と現実を調和させなければ、コトは前に進まない。そして公園は公園というわけにはいかない。公園も都市も、そのすべてが「ランドスケープの理想」の舞台であると考えたい。パークマネジメントから、ランドスケープ・マネジメント、更にエリア・マネジメントの時代に向っているのだから。

ともあれ私が本書で伝えたかったのは、日比谷公園の“豊かで魅力的な公園生活史”についてであるが、実は日比谷公園に代表される東京市独自の“公園行政の独立採算制下の公園行政の知恵と努力と成果”についても一般市民にわかしてもらおうということである。

それは、公園と公園マンの、いいかえれば造園家というものも持っている“矜持・プライド”でもある、それを言いたくてサブタイトルを「100年の矜持に学ぶ」としたのである。

造園とは何か！ ランドスケープとは何か！ その志を高く掲げ、社会と向きあうべきことを読みとっていただければ幸いである。

ところで造園学会における私の研究では日本庭園のイメージが強く、公園や造園計画の計画原論分野でデータにもとづく論文をもいろいろ発表してきたのだが全く知られていない。学内事情もあって他学会で発表してきたためもある。そこで、日比谷公園調査の契機となった「安定空間の構成に関する研究」(1)～(11)、1977-1978と、日比谷の公園利用者を対象にした“公園考現学”など「日比谷公園の総合的研究」(1)～(8)、1983のタイトル一覧と、私の研究室に在室した共同研究者の名前を列記し、この際謝意を表しておきたい。それらは私の公園研究のもうひとつの特色である“ユーザーの視点”からの計画論のバックデータの一部である。フィールド調査などに関心のある会員各位の参考になればうれしい。

進士五十八 (1978. 9) : 安定空間の構成に関する研究,

特に基本的概念と具体的な安定域値についての調査結果 : 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海道), 657-8

進士五十八・加藤 貢 (1977) : 安定空間の構成に関する研究 (1), 特にペープメント・パターンのスケールの標準化について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (48), 201-4

進士五十八・山本弘光・石井昇 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (2), 特に、特定空間における利用者行動と空間質の関係について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 293-6

進士五十八・青木宏達・山崎達郁 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (3), 特に、園地空間に於ける利用者の占有位置を規定する環境条件としての依拠要素について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 297-300

進士五十八・大野良昭 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (4), 特に、樹木による外部空間限定効果について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 301-4

進士五十八・武田静 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (5), 特に、園地空間における利用者間の安定距離の標準化調査について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 305-8

進士五十八・吉村ゆみ (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (6), 特に幼児の安心行動圏スケールからみた安定間距について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 309-12

進士五十八・小西雅宏 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (7), 特に、垂直安定域と高さに対する児童の反応の設計標準化について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 313-6

進士五十八・斎藤進・下田秀機 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (8), 特に、芝生斜面に於ける休息姿勢と安定傾斜域について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 317-20

進士五十八・田畑由紀夫 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (9), 特に方向感覚維持のための平面曲折角の限度値について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 321-4

進士五十八・榎本俊康 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (10), 特に、歩行リズムからみた時間的安定について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 325-8

進士五十八・杉本神公 (1978) : 安定空間の構成に関する研究 (11), 特に、視野の立面構成における左右のバランスと左側依拠特性について : 日本建築学会関東支部研究報告集 (49), 329-32

進士五十八・鈴木誠・水口聡子 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (1), 歴史的積層空間としての日比谷公園の性格と生活史的考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集

(54), 145-8

進士五十八・鈴木誠・柴田裕美 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (2), 公園利用実態の 24 時間調査による空間生態学的考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 149-52

進士五十八・鈴木誠・須之部大・桂川孝裕 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (3), 利用者生態の類型的把握による園内単位空間特性の考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 153-6

進士五十八・鈴木誠・小出茂 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (4), 利用者の意識レベルからみた日比谷公園の利用特性と園内単位空間の評価に関する考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 157-60

進士五十八・鈴木誠・伊藤大地 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (5), 都市および東京の中の“日比谷公園”に

対する社会的認識の考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 161-4

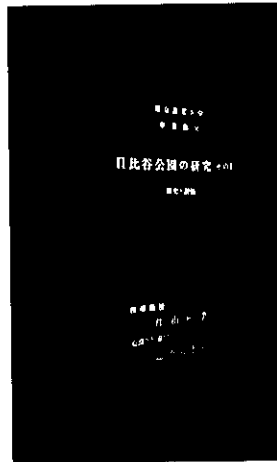
進士五十八・鈴木誠・清水松次 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (6), 園内単位空間のイメージ因子と空間構成の対応関係の考察による心理的空間評価法 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 165-8

進士五十八・鈴木誠・新畑朋子・酒巻紫 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (7), ベンチの占有頻度とベンチ空間の心理的評価並びに空間の物理的条件の関係についての考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 169-72

進士五十八・鈴木誠 (1983) : 日比谷公園の総合的研究 (8), 日比谷公園に関する総合的研究の意義と各調査研究方法の有効性並びに問題点の考察 : 日本建築学会関東支部研究報告集 (54), 173-6



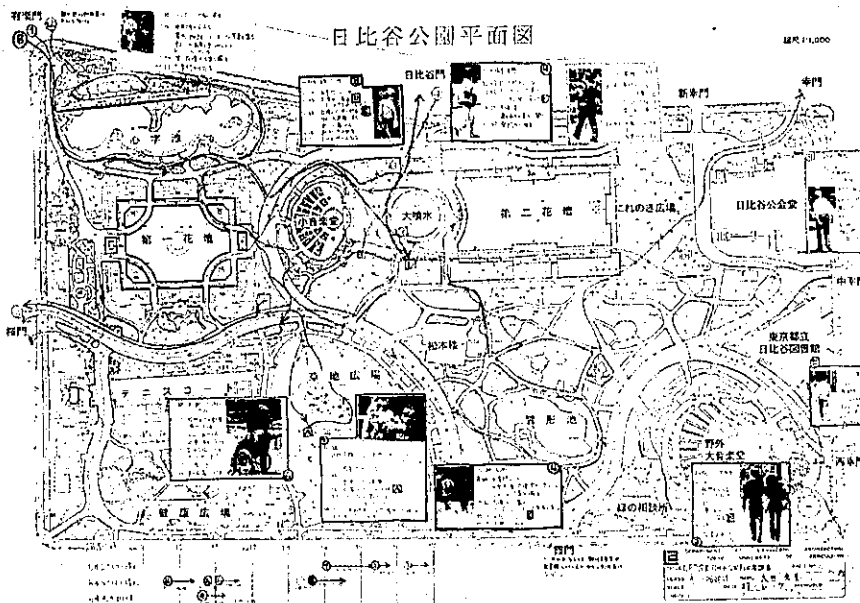
前島康彦, 日比谷公園ものがたり (東京都公園協会, 1963)



進士五十八, 東京農大卒論のうち日比谷公園の歴史と評価 (1969)



進士五十八, 日比谷公園・100年の矜持に学ぶ (鹿島出版会, 2011)



日比谷公園の利用者ウォッチングの演習例
東京農大造園学科学生の初期体験として、
1 / 1000 白地図に利用者の入園時から退園時までの経路、ベンチなど滞留位置、時間、そこでの行動を詳細に記載させる。公園のつかわれ方、空間の選択性、設計とは想定外の利用など、公園利用のすべてを丸ごと体験させる学習法として考えたものである。

『動物園革命』—生息環境展示をつくる—

The Zoo Revolution – Creation of Landscape Designs Exhibiting Natural Habitats

若生 謙二* Kenji WAKO

1. はじめに

『動物園革命』(岩波書店)は、私がこれまでに大阪市天王寺動物園の「アフリカサバンナ」や「アジアの熱帯林」、横浜市よこはま動物園ズーラシアの「チンパンジーの森」、長野市茶臼山動物園の「レッサーパンダの森」などで取り組んできた、生息環境展示という新しい概念の動物園をつくる過程をドキュメントとして著したものである。

生きた野生動物を展示する場所である動物園は、生物多様性への理解を育み、種とその生息環境を認識し、それらに対する保護のメッセージを伝える場として格好の役割をはたすことができる。そのためには動物園がそのような印象を与える環境を整えている必要がある。生息環境展示は国立公園や野生動物保護区で動物に出会うのと同じような環境をつくりだそうとするものである。そのため、従来の動物園とはつくり方が根幹から異なっている。

本書は、世界の大きなうねりの中で、動物の生息環境に向きあうこのような展示がいかにつくりだされてきたのか、その考え方が形づくられ、実現してゆく過程を著したものである。同時に、動物園の歴史と展示の研究から新たな動物園の実現に取り組んできた自伝でもある。

本稿では受賞業績である本書の内容を紹介するとともに、刊行後、取り組んできた動物園革命の最先端の様子を報告することにしたい。

2. 生息環境展示をつくる

(1) 生息環境展示とは

動物園の展示は、動物を展示の場に囲うために檻や柵を用いることから始まる。1907年にドイツのハーゲンベック動物園で檻や柵の視覚的な見えにくさを解消するために、動物を囲うのに堀を用いたアフリカサバンナのパノラマ展示が開発され、その後、堀を用いた無柵式の展示とともに、動物を生息地との関係で展示する生態的展示が普及してゆく。生態的展示は、わが国では古くは1930年代に行われた岩礁に生息するアシカを展示したアシカ池や、氷壁の地に生息するホッキョクグマの擬氷の展示などがある。また、

1960年代から1970年代にかけてつくられた、アフリカ区、アジア区などの動物地理学的配列の展示もこの範疇にふくまれる。アメリカでは1970年代末頃から生息環境に入り込んだ感覚をもたらすランドスケープ・イマージョン(landscape immersion)の手法が登場してきた。また、わが国では2000年頃から旭川市旭山動物園の行動展示が人気を博し、他方では生息地の調査にもとづいて設計された、体系的な生態的展示である天王寺動物園の「アジアの熱帯林」などが開設され、幅広い取組みがなされてきた。

動物園展示の考え方や方法について整理したものではなく、近年、従来の展示を刷新しようとして動物園を計画する現場では、計画の方向性を見定めることに困難をきたす状況がみられていた。そのため、本書ではこれらを整理することに力を注いだので、本稿ではこれらについて述べ、生息環境展示の位置づけを行うことにする。

動物園の展示の課題は、動物の生息環境の再現を図り、本来の行動や習性(behavior)を発揮させて、展示することである。

動物の生息環境(habitat)は、森や草原や水辺などであり、生息環境の再現を図るとは、これらの場をつくることである。動物はこうしてつくられた場で、本来の行動や習性を発揮する。生態とは生物とその環境との関係である。環境には、動物や植物などの生き物だけではなく、それらが生きる場である大地や岩場、川や湖などの無機的環境も含まれる。したがって、生態的展示とはこれらの関係を展示するものであり、可能な範囲で再現した生息環境のもとで、野生状態での生態としての行動や習性を発揮させる取組みである。生態的展示が環境の再現に力を入れるのは、遊泳、採食など動物の本来の行動をひきだすためであり、生態とは生息環境という場と、そこでの行動をふくむ生活のすべてである。

旭山動物園の行動展示は、生息環境の場をつくりだすのに、生息環境の中から行動を発揮させる要素をとりだして、人工的な環境をいわず積極的にとりいれて動物の行動をひきだしている。したがって、旭山動物園の行動展示とは、

* 1954年大阪府に生まれる。1976年信州大学農学部林学科卒業、1978年同大学院農学研究科森林工学専攻修了、1993年東京大学農学博士。1994年大阪芸術大学環境計画学科助教授、2000年ハーバード大学ダンバートンオークス研究所客員研究員、2004年大阪芸術大学環境デザイン学科教授となり、現在に至る。